L
田辺の五条坂
館内
坂
291
ゴ
まるくらむ
図書館に

戦争と五条坂

製陶業　堀尾竹荘

今日は昭和五十三年十月二十八日土曜日、京都教育大学二回生岡路修次郎君と前園千鶴さんの訪問を受ける。前から約束してあった戦争と京都のテーマの実地探訪の堀尾竹荘宅への訪問であった。

書物によって、また京都府資料館の資料によっての研究編集では血がかよわないので、体験者と面接して実地のいきぶきを感じたいというのである。

五条坂の強制疎開のことだが、そのとき十七歳であり、大久保の国際航空へ勤労動員に行っていた。区役所から、二十年三月二十五日までに、建物を撤去される通知がきた。

父の弁三郎は亡くなっており、母が経営していた。私たちは七人兄弟であった。平野の窯にて企業合同していた。道具、実績をより合って合同体をつくったのであった。そのような状態で園部の親類をたよって荷物の疎開をしていたので、緊急のこの非常時に残りの他の家財を園部へうつすことにした。

一週間の期間をおいて警訪団、軍隊によってとりこわされた。新しい立派な家だったのにの思いがいっぱいであった。

ロープを主柱にまきつけて引き倒されたのをみている自分は耐えられなかったと今でも思い出している。

荷物の一部を藤平さんの西店に収容させてもらって大変助かり有難く思った。倒された家は実に無惨なものであった。燃料のないときであったから材木を拾って帰る人が群をなしてやってくる。家屋が倒されて土煙りのあがるさま、まことにあさましいことであった。

馬町の爆撃のときには、一弾は鳥辺山の通妙寺に落下して多数死傷者がでた。実際の感じとしてはやはり戦時であったので爆弾のことも、大きなショックではなかった。

それから私は丹波の「大江山ニッケル」に就職することになったが、そのうちに終戦になり、二十年十一月に消防署前の今の宅に入ることができたのはしあわせであ

った。そのときお世話になった前所有者の京都製陶の馬場さんの人情に今も感謝している。

祖父は元七じいさんといって、立派な人であったという。その名をとって元子という妹がいるのでもわかる。

父の弁三郎は、この秋、文化勲章を受賞された楠部弥弌先生と同期で、昭和五年、五代清水六兵衛氏を会長として設立された、陶芸家の研究団体である『五條会』にいち早く参画し、種々活躍したと聞いている。昭和十二年、四十四歳で没した。その画像が今も部屋にかかっている。

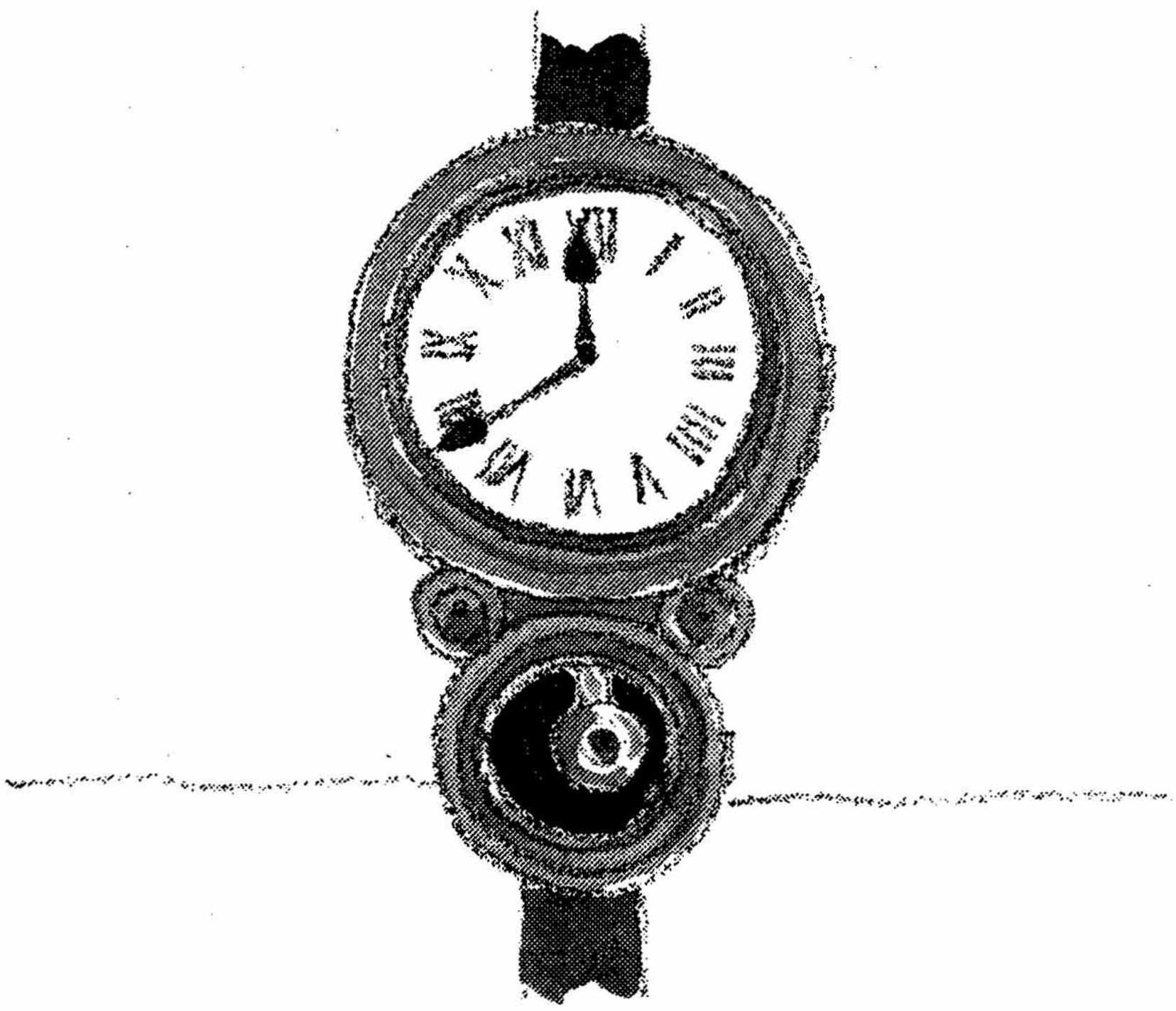
警防団は昭和十七年頃、警察の補助員としてできた。私は二十一年に入団、そのうちに消防団が二十三年三月にできて、今年三十年勤続の表彰を受けた。東隣りは袋中庵、向いは小川文斉さん、五条坂の入口の家である。今でも法務局に堀尾の地所が昔のまま記載されている。

今ははげしい自動車道路になってしまった。日曜日にはひどくこみ合っている。横断歩道の白線より少し西で公衆電話のある所が堀尾の地所である。戦争の夢のあとである。

学生達は問う。戦争をどう思うかと。有事立法が問題になっている。

「戦争はもうこりごりどすわ」

話の結論はこれである。そして戦争を起こしたことについては、軽々しく批判することはできない。太平洋戦争を頭から非難することは、どうかと思う。世の動きは、大きな波のような、どうすることもできないものがある。この機会に、あの戦争をみつめ直さねばならない。



京都市中央図書館
3311159538
M746AF6